

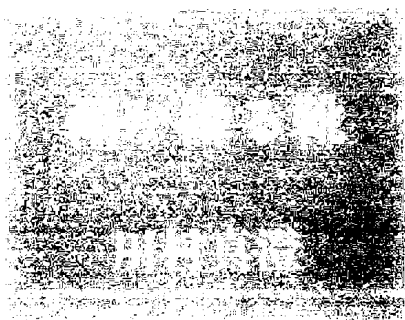
Kawamura Masumi

雨が降る靴

川村真澄



KAWADESHOBOSHINSHA



雨が降る靴

一九八九年三月一〇日 初版発行
一九八九年五月二十三日 再版発行

著 者 川村真澄

装幀者 原田 治

発行者 清水 勝

発行所 株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 編集〇三―四〇四―八六一
営業〇三―四〇四―一二〇一

振替口座(東京)〇―一〇八〇二

印刷 東洋印刷株式会社

製本 和田製本工業株式会社

© 1989 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

ISBN4-309-00533-5

川村真澄(かわむらますみ、
一九五七年一〇月二二日、
新宿区に生まれる。東洋大
大学英文科卒業。現在作詞
活動中。
本作品は初の書き下ろし出
ある。

雨が降る靴

そういえばむかしから、考えごとばかりをしているような子供だった。

まさか、この私が、人を好きになるなんて思ってもみなかったし、人じゃなくても、指差したり、触ったり、ありありとようすを思い描いたりできる何かを、好きになるなんて、信じられなかった。

『カリフォルニアの青い空』という歌がある。「カリフォルニアには雨は降らない」とかいう内容だったと思う。

私は今、サンタモニカのホテルにいて、窓の外に広がる、どんよりとした空と海を見ている。いつたいどこが、「カリフォルニアの青い空」なんじゃ、とか思いながらも、でももう夜の八時をまわっているというのに、まだ日が暮れる気配がないのは、とてもいいかんじだ。

空港からホテルに着いてすぐ、レンタカーを借りた。もうなんでもかんでも、自分でやんなきゃならないし、そういうことがつまらない感傷を吹き飛ばしてくれるかもしれない。

レイさんが「心の病なんて、牛のうんこよ」と言つてたのを思い出した。牛のうんこか……彼女らしい言いかただわ。

あれからもう半年が過ぎてしまつた。いろいろあつた。

私たちは二重の時の流れを歩いている。ひとつは日常生活。人とかかわりあいだとか、つまらない事件だとか、恋とか、悲しみとか。そして、もうひとつあるのは、『待つ』という時の流れだ。生活の中で、誰かを待つ、ということのほかに、私たちはいつでも、川の上流のほうから、おもいがけずに流れてくる木の葉を、待っていたりするものだ。

そのふたつの流れは、決して交わることがない。だけれどもところどころ落とし穴や、隠し階段があつたりして、知らず知らずのうちに、日常生活の流れから転がり落ちて、『待つ』という流れに、とても冷たい流れの中に、ブーツと足をつけていることがある。

恋が終われば、忘れ去る日を。そして次の恋を。私たちは、いつでも待っているのかもしれない。

ここは、決して雨の降らない場所。

あしたの朝起きたら、あの靴を履いてビーチを散歩しよう。

ここならきっと大丈夫。雨は降らないと思うから。

今年もお正月休みが終わって、大学が始まるには、まだ間があるという、ズベズベとしたタイムラグのような日々が続いていた。

私の住む西麻布のワンルームからは、歩いて二十分はかかるといふ、六本木の明治屋というスーパーに、エスプレッソ用のコーヒー豆を買いに行った時だった。

最近を着るものが高くてバカバカしいので、コンディションの良い、中古のミシンを、誰か手放す人はいないかと、必ず、入り口のインフォメーションをチェックするのが、私のくせになっていた。

英語のレッスン、子供の家庭教師、いらなくなったワンドアの冷蔵庫、ルームメイト、一年前のシャネルのプレタポルテ、など、さまざまな情報がピンでとめられていたが、人気のないものは、いつまでたっても連絡先の電話番号が切り取られないまま、誰が動かすのやら、だんだんとすみっここのほうへと追いやられて行くのが、かわ

いそうでおもしろかった。

去年は、お金があんまりなくて、このインフォメーションに出ていた、五千円の冷蔵庫を、友達に頼んで一緒に取りに行ってもらって手に入れた。でもそれも、暮れにやったバイトのお金で新しいのを買ったおかげで、また、今、びんぼーな人のところへと、お嫁だか、お婿だかわかんないけど、もらわれて行ってしまった。あの冷蔵庫、こんなふうに転々と、同じ境遇の人の部屋に住んでんのかと思うと、なんだかいじらしくて、とうとうぶっこわれた、って時には、持ち主だった人、全員を集めて、その最後の台所で、酒盛りでもして引退を祝ってあげたいような気分になった。

もっと新しいヤツ、もっと楽しいもの、もっとイイこと。そーゆーのを見つけて、手に入れて、それで、古いのとサヨナラするのがいい。これだと、サヨナラしちゃったヤツのことを、あんまり考えないですむ。

だけど恋とか、人との付き合いとかは、べつだ。

悲しいのは、自分の方からサヨナラしたくせに、いつまでたつても、心の奥には、がしそこねたスーパールのシールみたいに貼りついて、なかなか離れない、そんなことかもしれない。

その日も、いつものように立ち止まって、コルクボードを右から左、上から下と、

目でなぞった。

とても奇妙な、なんつか風流とでも言いましょうか。こんなオフアールする人もリクエストする人もいるんだろうかっていう、インフォメを見つけた。

『雨を降らせたいかた、電話で相談に応じます』というヤツだった。

特に、雨を降らせたい、ってなわけでもなかったけど。きつとだれもが好奇心をかきたてられたにちがいない、その電話番号を、私は記憶にゆだねることにした。もしも、切実に雨を望んでいたのなら、バッグから手帳を出してメモしただろうけど、ま、近所ってんで、ろくにバッグも持たずに出てきたことはたしかだが……、とりあえず、おもしろそうじゃん、って軽い気持ちで番号が書いてある場所を探した。

そのインフォメカードは、ほかのものよりも小さくて、なにかきれいな名刺のようで、字がすごく細かったのだ。

で、一生懸命番号を探したんだけどさ、どうやら数字ひとつも書いてナイ。なんだ、コイツは！

きつとこんなふうな、この好奇心というヤツのせいで、壁に顔をくつつけた人が、何人いたことでしょうね。

「バアにすんじやないよお」と、小声で言ってもういちどそのカードをにらんだ。「バアにすんじや」が勢いよくて、「ないよお」が急にゆっくりになったかんじね。

「バアにすんじゃ ない よ お……」だな。

カードの下の方にね、めつけたのだ。私は。Call「she cook to rock two」って書いてあるのを。

「シー クック トウ ロック トウ かあ？ なんのこっちゃ」

スーパーに來ると、いらぬものまでつい買ってしまうというくせは、きっと世の女性がたには多いものでしょう。ご他聞にもれず、わたしもそう。だけど、その日だけは、かたく心に決めて、そう、カンケーナイものを買わないようにと、で、りっぱにエスプレッソ用のコーヒーだけをビニール袋に泳がせながら、私は、その「シークック」って暗号に、いいかげんなメロディーをつけて歌いながら、材木町の坂を闊歩して帰った。

アキラという男がいる。これは、つまり、私の彼氏だ。

アイツもやつと正月休み明けて、田舎から東京に戻って來ていた。

じつを言うと、ちよつと情けないけど、私はアキラにナンパされたのだ。もう二年も前のことになるけどね。ま、よく続いていると言えよう。

その日買ったエスプレッソをたっぷりミルクに入れて、なんとなしにリッチなシャ

ワー後の一時間を過ごしていた。

鳴り響く電話のベル。これはもう、アキラしかない。

元日の朝、お互いの実家から電話で、「本年もどーぞヨロシク」などと、電話でなければ言えないような挨拶をかわし、東京に帰ってすぐ、初詣をかねて、車で鎌倉に行こうと約束をしたのだった。

なんとなくイヤーな内容の電話じゃなかったときの、ベルの鳴りかたつてあると思いませんか？　なんか妙に一回分が長くて、次との間隔も長いような、そんな、鳴りかただったので、私は飲んでいたエスプレッソ・コン・レーチェをカップ＋ソーサーごと持って、電話のところへと移動した。

「ゴメン、ゴメンゴメンゴメン」

「そんなんだと思った。どーも長かったもん」

「えっ、なんの話」

「わかってるよ、あしたのキャンセルなんでしょ、誰のレコーディングよ」

アキラは、去年大学を中退して、なんとかというレコーディングスタジオで、ミキサーのアシスタントをしている。テープを回したり、お茶を運んだり、出前のメニュー調べから器のあとかたづけまで、とにかくなんでもやる、という、いわば雑用係り。「オレもよく知らないんだけどさ、どっかのガキ。急にCMが決まりそうで、それよ

うに落とし直すんだってよ」

このレコーディング用語については、私も一時はマスターしようと試みたこともあった。しかし、あまりに頻繁にいろいろ出てくるので、途中であきらめて、聞き流す態度を決めたのだ。だいたいかけだしの人間にかぎって、専門用語などを日常会話にふんだんにもりこむものと相場が決まつてゐる。アキラ、オマエはまだ青いぜ。

「あああ、ひとりで行っちゃおっかな。あんたがガキのなんかをオトスんだったら、あたしだってこのバッドラックをどつかに落とさなきゃね、正月早々、エンギ悪いし……」

「んー、わるいつ、一時からだから、ひよつとして二時間くらいで終われたら、夕方からでも行けるかもしれない。ちよつと自宅待機しててくれないかな。もし、だめだったら、夜、メシおごるからさ、とにかく家にいてよ」

ひよつとしてえ、二時間で終わるう？ そんなワケねえだろ、いつだってこれだもん。何度すっぱかされたことやら。

「うん、ぜんぜん期待してないから、安心して。とりあえず家にいるかどーかわかんないけど、電話してみてよ」

出会ったところだったら、くそまじめに一日中電話のまわりで、アキラのことを待っていただらうけど、私だって、二年がかりで学習したし。こーゆーバイイはいつだっ

て、寝るころにかかってきて、「あー、疲れた」なんて言われちゃうもんだから、文句のひとつも言おうと思ってた心意気も、ペケペケとくじかれてしまうのだ。

南に向いた窓のブラインド越しに、大きな文房具メーカーのネオンサインが点滅するのを、ながめながら電話を切った。

ブレードランナーみたいだ。このネオン。

西暦二〇〇〇年になったときのことを漠然と考えるように、なんであしたのことを考えられないんだろう。あしたのことに關しては、あまりに許容量が小さすぎるよ。人間って。ま、十二年後にひとりでいることより、あしたひとりってほうが、だんぜん寂しいけどね。

それにしても、アキラのヤツには頭にくる。初詣つてのには、やつぱりなにかしらのロマンを感じてしまうものなのに。

それも、恋人どおしが首を揃えてお参りするつつうのは、なんだ、特別な意味もあるんじゃない？ 今年もこの人と一緒にいられますようにって。頭をちよつと下げながら、手を合わせるなんざ、こう、いじらしくなっちゃうよね。

とりあえずコーヒークップを洗って、いきなり放り出された「あした」という日をどう埋めようかと、足の爪の手入れをしながら、ポーポーと考えた。

そのとき、なぜだかさっきのメロディーが頭に復帰してきたのだ。

「シー クック トウ ロック トウ……シー クック トウ ロック トウ……」
自分から電話くれてインフォメ出してるくせに、なんで番号を暗号みたいにするのやら……。ひまだから解いてみるかな……。

「彼女はふたりを揺らすために料理をする」

カッチョイイ文句だ。本当にふたりをゆらゆら揺らすような、そんな料理をできる人がいたらカッチョイイ。

たぶんね、南仏のプライベートビーチ付きコテージかなんかで、エマニエル夫人みたいな簾のチェアにゆったり座って、ちよつときれいなフランス姉さんが作る、ニース風の魚料理の匂いが、キッチンの方からだだよってくるのを、恋人とふたりして風に揺れながら、無言で感じていたりするんだな。ああ、なんてロマンチック。

そんな姉さんだったら、きつと雨だつて降らせちゃうはずだ。

そんなことより……。つと。

日本語に直してしまったことで、ほんの十分だったけど、ロスしてしまった。ただ、音を数字にすればよかったのだ。

「シ クク トウ ロック トウ」

「シ」は「4」。「クク」は「99」。「トウ」はきつと「2」「ロック」は「6」かな。

で「トウ」はもういちど「2」。これでどうだ。

「4991262」

ん？ これじゃオカシイ。ええ……。そっか、「ロック」は「69」だ。

「49912692」

カンペエーキ！

「シー クック トウ ロック トウ」

なるほどね。

もう十一時をまわっていた。人の家、それも見ずしらずの人のところへ電話をかけるのに適した時間ではない。

しかし、私はこの謎を解いたというお手柄を、誰かに褒めてもらいたくなってしまう。それに、さっきの「アキラ失礼事件」のおかげで、あしたなんて、雨でも降っちゃやあいんだ、って思ったのも事実。これこそ一石二鳥というもんだ。

そのときはなにを間違えたのか、その電話番号の持ち主を、「ふたりを揺らすために料理をしてくれるお姉さん」と同一視してしまっていて、彼女ならこんな夜中でも許してくれる、とかってに決めこんでいた。だいたい、オンナだともかぎらないのに。

彼女のマンションはちょうど明治屋の裏手にあった。うん。やっぱりオンナだった

のだ。

私はいちおう初めての人の家におじゃまするときの礼儀として、手みやげに「ドゥリエール」というレストランの蒸しケーキを四つ買つて、昨晚電話でことこまかに聞いた道順を右左確かめながら歩いて行つた。

ドキドキしながらブッシュホンを押して、呼び出し音が途切れたかと思つたら、出て来たのは留守番電話のメッセージとポール・マッカートニーの「アナザー・デイ」だつた。

名前すら名のらない、そつけないメッセージを聞きながら、これは切つたほうがよからうか、メッセージを入れるべきか悩んで、結局せつかくだから、つて、発信音のあとにちよつとおろおろしてるかんじで「えつと、原田真美はらだまみというものです……明治屋のインフォメーションを見て、で、お電話いたしました。この電話番号で当たつてるといいます……が……また……」

と言つたところに、

「はい、当たつてまあす」つて声が、割り込んできた。

あまりに突然な攻撃だったので、それまでおろおろしていた神経が、いつきに立ち上がったような感じで、まともな応対ができるまで、たぶん三十秒はかかったことだろう。